ほんない歴史通信
第１２号
1999.9.1

近世の村と知識人

江戸時代の大子地方は水戸藩の支配を受けて、今の大字がそれぞれ村として成り立っていました。村にはある程度の自治が与えられていましたので、村政は村内のいわゆる知識人によって指導運営がなされていた。

庄屋・組頭などの村役人は、村人が農業に精を出し、真面目に働き、決められた年貢を期限内にきちんと完納できるかを、常に問題意識としてとらえる政治行政観を持っていなければならなかった。

また一方、神官・僧侶・山伏などは、倫理観や宗教的な哲学観から村人たちの悩み事や、困り事、心配事などを精神的な面からアドバイスして支えた。

それに加えて郷医と称されていた在村の医者は、村人の病気けが、出産など医療全般に携わりながら、人体の不思議、人間の生命観などを医学的立場から啓蒙につとめた。

このように三者三様にそれぞれの立場から、いかにしたら村内が融和して、人心が安定するかを常に腐心していた。

江戸時代も中期以降になると、これらの指導者以外からも多方面にわたって、学問に志す新知識人が現れて来るようになったのである。大子地方にも、当時の水戸領内外にまで、広く名前が知られるような人がいた。

思いつくままに列記してみると

一、野内浮石（東郊斉）　相川村の人で若くして江戸に遊学して、荻生徂徠の高弟服部南郭に徂徠学を学び、水戸に戻り塾を開き、朱子学一色だった水戸に徂徠学を導入した。水戸彰考館の総裁だった立原翠軒をして野内大先生といわしめたほどの人物。後、郷里へ帰り近郷近村の子弟を教育して一生を終えたという。また絵もよくたしなんだという伝承が残っている。

二、黒崎貞孝（洗心）　大子村の人で、地理に興味を持ち水戸領内外をよく歩き、紀行文体の地誌「常陸紀行」（別名、漫遊紀談）を著した。

三、佐川立元　小生瀬の医者で杉田玄白の解体新書の影響を強く受けて、天明年間に水戸領内で最初に、医学的立場から人体解剖の許可を藩に願い出て許された。ただし実際の解剖は寛政年間だったと思われる。

四、皆吉　文　大子村出身の医者で、若くして江戸に出て頭角を現し、一橋家に出入りし、維新後は慶喜について静岡に移り清水次郎長の客分として迎えられ、静岡時代の慶喜の側医の一人として仕えた。

この他、大子村の陣屋が置かれた享和年間に陣屋付の医者として取り立てられたのを契機に、後に大子郷校の医師世話係となり親の立元、子の立達、孫の元達と三代にわたって、保内郷地方の郷医の指導的立場を勤めた、外大野村の高藪こと斉藤一族、また親子三代にわたって寺子数百人を数えたという下野宮村の志賀一族、狂犬病の治療法研究に情熱をそそいだという慈雲寺の僧大雲など保内郷の近世人物列伝も多士済々である。

何れ機会をみて詳しく紹介したいものである。

（吉成）

［学校昔シリーズ］ 3

教科書の歴史

江戸時代が終わり明治になると、日本は「諸外国に追いつけ」を合言葉に、特にヨーロッパの国々の文化を取り入れるのに躍起となった。ヨーロッパはすでに機械文明が発達していたから、それに肩を並べるには、どうしてもまず真似をするほかなかったのである。鉄道も、郵便制度も、法律も、教育制度も大急ぎで外国の真似をしたものが多かった。

それまでわが国では寺子屋で学ぶのが普通で、それも全部の子供がというわけではなかった。「教育は百年の大計」というわけで、誰もが教育を受ける事の大切さを強調して、フランス式の学校制度を造った。全国を八大学区、更に中学区、小学区と整然とした学区制をつくった。例えば、袋田小学校は、「第一番大学区第三七番中学区第一六六番小学区袋田小学校」である

さて学区制は決まっても困ったのは教員の確保と、教科書の問題だった。校舎も無く、とりあえずお寺や民家を借りて、寺子屋とあまり変わり無い状態で出発したところが多かった。教科書は、最初は江戸時代の論語など復古調のものや、欧米の翻訳物が多く使われた。次第にそれらをまとめ、学年段階別に編集して、明治十九年には検定制を取り入れようやく教科書らしい形になってきた。

やがて、全国的に教育の水準を維持する必要から、明治三十六年小学校令施行規則を改め、翌三十七年から第一次国定教科書が使われるようになった。日清日露戦争を戦った日本は教育の国家統制の必要に迫られたのである。明治四〇年義務教育が六年に延長されたのに従って、教科書も修正され、「ハタ、タコ、コマ、ハト、マメ」の第二次国定教科書時代になった。

大正七年、第一次世界大戦後の社会情勢の変化に従い、教科書が改正され、第三次国定教科書になる。「ハナ、ハト、マメ ミノ、カサ、カラカサ」の時代になる。

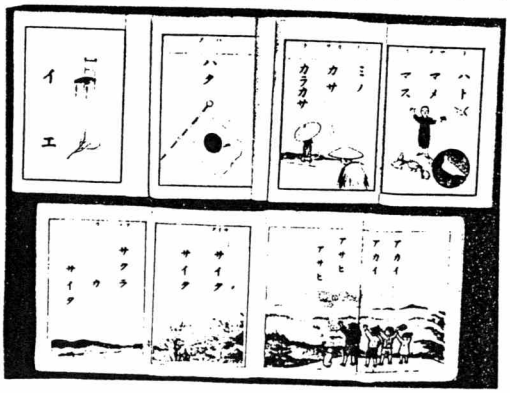
昭和六年の満洲事変後、教育思想の変化により、昭和八年第四次国定教科書になり「サイタ、サイタ、サクラガ、サイタ」になり、国粋主義、軍国主義の色彩が強くなってきた。

日本の大陸進出が始まると、軍国主義の勢いは更に強まり、昭和十六年には、「ヘイタイサン、ススメ、ススメ、チテチテタ、」と戦時色は強化された。

これらはいずれも、小学一年生の国語の最初のページである

この昭和十六年、小学校は国民学校と改正された。そして十二月八日に太平洋戦争が始まり同二十年八月十五日に終戦となった。戦後は、戦時中の教科書を方々墨で塗りつぶして使ったり、あるいは折り畳みの薄っぺらな教科書が使われた。

教科書を造る紙も、印刷も間に合わなかったのである。

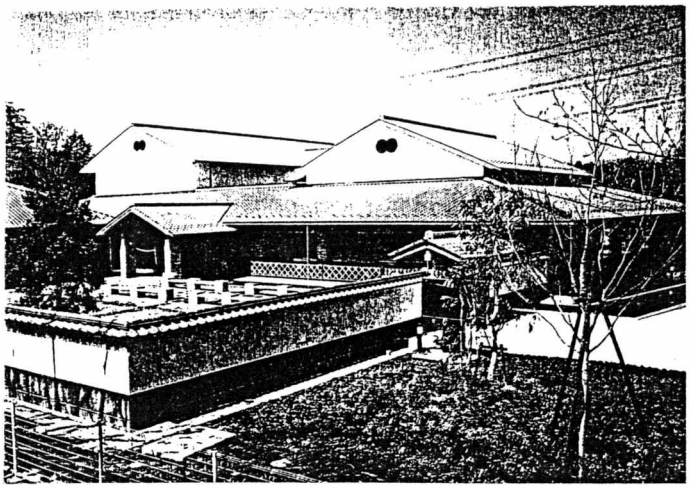


昭和二十二年、学校教育法が公布され六、三、三、四制になった。同二十四年には教科書は検定制になり、次第にカラー刷りの教科書も現れるようになった。昭和二十六年より、教科書の無償給与が始り、三十八年からは制度として確定し、現在に至っている。昔は、兄の使った教科書を弟が使うというようにしていたのに、今は少し贅沢のような気がする。（石井）

【資料館めぐり】

市民に親しまれる郷土史の宝庫

―下妻市ふるさと博物館を訪ねて―



下妻市の郊外、閑静な雰囲気をただよわせるなかに建つ真新しい和風建築、それが下妻市ふるさと博物館です。市制施行四十周年を記念して建てられ、平成八年五月三日にオープンしました。建物は、戦国時代の城主多賀谷氏の居館をイメージしたものであり、建物それ自体にも地域性を反映させて、私たち訪問者に魅力を感じさせてくれます。

この博物館は、常設展示室、企画展示室と大きく二つに分かれています。まず常設展示室は、下妻の自然、下妻の歴史、水とのたたかい、農家のくらし、くらしの道具、下妻の商業、下妻の祭りと伝説、下妻ゆかりの人々、横瀬夜雨記念室などの多くのコーナーから構成されています。それぞれが映像やパネル、模型、資料、養蚕農家の一部復元、あるいは昭和四六年から収集している豊富な民俗資料等を用いて具体的に表現されていて、見る者をそれこそ「ふるさとの歴史の世界」に誘ってくれます。なかでも圧巻は、横瀬夜雨記念室です。直筆の書簡や原稿、パネルを通して、詩人として、日本の文学史上に大きな業績を残した横瀬夜雨の人物像や詩の世界を理解することができます。こうした常設展示物は、一度の訪問だけではとても見切れないため何度でも足を運びたくなる、そんな気分にさせてくれます。

他方、企画展示室では、企画展と下妻に関連して功績のあった人物を中心にする特別展がそれぞれ年二回ずつ開催されています。例えば平成十年度には、企画展として「大地への祈り～縄文の呪具～」と「天狗党展」が、特別展として「刀～下妻が生んだ刀匠國家とその継承者たち～」と「書道家～皆葉華道～」が催されました。館内には記帳台が設置されていて、そこに記帳した方のうち市外に住む人には翌年度の初めに企画展、特別展の年間計画を郵送し、また市内に住む人には、自治会を通じて全戸配布しています。催しの内容を一人でも多くの人に案内し、一人でも多くの人に来場してもらうための工夫でしょう。

運営面で興味深く思われたのは、博物館と市民の間を多様なパイプで結び、市民に親しまれる施設にするためにいろいろな配慮がなされていることです。館長の説明によると、アンケート調査であれ直接語り掛けることであれ方法はともかく、利用者の声にまず耳を傾けること、これを基本にしているようです。そのうえで、例えば博物館の施設を市民の種々の催しに、あるいは子供会の会議や企業の研修会に開放しています。

もう一つ特徴と思われる点を付け加えますと、建物の二階は収蔵庫になっていて、そこには膨大な数の民俗資料が収められていることです。それは、私には宝の山のようにも映り、強い羨望の思いを抱きながら博物館を後にしました。

（斎藤）

【史料紹介】

左貫の「吉成正俊氏所蔵文書」について

史料は天文五年（一五三六）から大正一四年（一九二五）「営業報告書」までの三九二点で、「文化年中から、左貫の吉成正伯の家に伝えられ」現在に至る。

吉成の姓については、「寛文七年（一六六七）吉成之事結城改号姓也」に、結城氏の偏を省略して吉成氏に改めたとある。天文五年太田城の佐竹義篤は鍬柄（左貫）の地を、吉成相模守に与えた。

天下分け目の関ケ原の戦いの後、慶長七年（一六〇二）佐竹氏は秋田に国替えになるが、「佐竹義宣公御国替供奉士」に、秋田へ同行した佐竹家臣一七二騎を記し、そのほかに、大子地方に土着した二九騎を「常陸居住士」として記載している。

年貢（税）関係では江戸時代の「寛文・元禄・安政年間の左貫村石高割付帳」が一四点、「享保一九年（一七三四）左貫村寅郷年貢小割付帳」など。村の戸数と人口については寛永五年（一六二八）から明治一五年（一八八二）までの「左貫人別帳」四点がある。

水戸藩儒学者立原翠軒との交際については、文化九年（一八一二）と同十年に立原より吉成正伯宛の書状一四通が残っている。

吉成家は代々医者を開業していたが、また古くから製茶業を営んでおり、「明治二十八年（一八九五）鹿島郡軽野村農会品評会出品緑茶解説書」によると、吉成誠（一八六一年生まれ）の製茶技術や品質向上への努力がうかがわれる。誠の子仁二は父と共に茶の改良に努め、戦後いち早く復興にとり組み、昭和二十三年（一九四八）佐原村茶業組合を創設する。

その他に明治時代の通達、地券、佐原村是、学事・役場関係、諸名士書簡（徳川侯爵、香川伯爵、水郡線建設につくした根本正など）、教科書、村絵図などがあり、当時の歴史を伝えくれる。（野内）

【編集後記】

今年の大子の夏は、文字通り夏らしい夏でした。ある時の気温は、三八度にも達したようです。一刻も早い、涼しい秋の到来が待ち望まれます。

「ほない歴史通信」第十二号をお届けします。今号の巻頭には、四月に歴史資料室に移られ、私たちのこの「通信」のメンバーにもなっていただいた吉成さんに早速執筆をお願いしました。長年の蓄積を踏まえて、はるか近世の時代、大子地方で活躍した知識人に光を当ててもらいました。ここに登場する人びとは、いずれも未だその軌跡が明らかにされておりません。今後の吉成さんの研究に待つところ大ですが、その成果は追々この「通信」に書いていただくことにいたしましょう。

本「通信」の編集人が執筆者になりまして、今年の六月から『広報だいご』に「大子の歴史散歩」の連載を始めました。一味違った読み物になっていますので、ご覧下さい。（斎藤）

編集人　斎藤典生（茨城大学人文学部）
野内正美（茨城県立歴史館）
石井喜志夫（元教員）
小澤圀彦（大子町教育長）
吉成英文（大子町社会教育課）
井上和司（大子町税務課）

編集発行　遊史の会
大子町立中央公民館歴史資料室気付
久慈郡大子町大字池田二六六九番地
〒三一九-三五三一　〒〇二九五-二-二六七